2026年1月00日発行
第40号

土屋グループと
クライアントをつなぐ季刊誌

土づくり

新年号

名前：小林奈々子さん（23歳）
出身：北九州市
病名：進行性脊髄性筋萎縮症

♫♪♩ 自分を探して ♪♩♫♪♩♫♪

明るく朗らかで、音楽フェスが大好きな小林奈々子さん。
その明るさを「生まれつきのいいところかもしれないです」と語る小林さんは、一方でとても気遣いのある女性です。今回は小林さんに、令和の就学・就労から恋愛事情まで、オープン&フランクなお話しを伺いました。

♫ 宝物だったかつての日々 ♫

私は1歳半で進行性脊髄性筋萎縮症（SMA）の診断を受けましたが、もちろん記憶にはなくて、私自身はただただ日々を楽しく過ごしていました。5歳で電動車椅子の免許を取ったんですが、周りにも車椅子の子が多かったので、「自分だけ」という認識も特になかったんです。

中学では特別支援学校に通っていましたが、今も「あの日々が宝物だったなぁ」と感じています。そこでは障害が原因の不自由さを何も感じなかったですし、友達と平等に遊べていました。たとえば普通校だと、ドッジボールをするとなっても、私は参加できなかったと思うんです。でも支援学校では車椅子の子も、知的障害がある子も、喘息で走れない子もいたので、一緒に遊ぶ工夫をするのが当たり前でした。何にするにしても、まずは「どうやってしようか」といったところから始まるのが良かったなと思います。

♫ 将来を見据えて ♫

将来の自立を見据えて、普通高校へ進学しました。ただ、そこでは友達作りにとても苦労して、3年間でできた友達が一人だけだったんです。それも3年生の時で、別のクラスの子だったので、3年間独りぼっちと言えなくもないかなと。だから、だいぶ辛かったですし、その頃は、「目立ちたくないな」とか「人の通行の邪魔になりたくないな」というのがすごくあって悩んでました。

でも車椅子である限り、悩んでも解決しないことだったんですね。もし、私がもっとうまく友達関係を作れていたら、そういうことを意識しなくてもよかったのかもしれないですけど…でもそんな中で、唯一高校を辞めずにいられた理由が、一人の先生が味方になってくれたからなんです。「自分の将来のために普通高校に通うという経験が必要だし、今勉強していることは決して無駄にはならないから」と、私の中に火を灯してくださったので、3年間頑張れたところではあります。

♫ 専門学校から就職へ ♫

高校卒業後は情報系の専門学校に進みましたが、まずは入学前が大変でした。休み時間にしか支援時間数が下りなかったので、15分のピンポイントでしかヘルパーさんについてもらえず、引き受けてくれる事業所もなかなか見つかりませんでした。役所の方がかなり力になってくれて、なんとか12事業所からいろんなヘルパーさんに来てもらえることになったんですが、そこからは私自身が「教室が変わった」とか「授業が5分延びそう」とか、日々の連絡をするのにかなり苦労しました。友人の手を借りるという選択肢もあるとは思うんですが、友人には〝通りすがりのおばあちゃんが困っている事以上の介助〟をしてもらうのがとても嫌で、介助は「ヘルパーさんにお仕事としてやってもらいたい」という思いが強かったんです。

学業では、プログラミングを専攻していたので、基本情報技術者試験という資格を取ったりしたんですが、「プログラミングには向いてないかな」というのを感じて、就職活動では一般事務を探しました。求人自体はたくさんあって、受け入れてくれそうな企業もいくつか見つかったんですが、それでも100、200と来る求人の中で、担当の先生が探して探して、ようやく数企業見つかっただけで、それもインターンや面接で落とされることがほとんどでした。

「うちに来てもらってもいいよ」と言ってくださる企業もあったんですけど、ヘルパーさんを会社の中に入れることに難色を示される場合も多くて、最終的に介護派遣事業所へ事務員として就職しました。ただ、今思うと、外部の方を会社の中に入れるというのは、企業秘密などもある中で線引きが難しいですよね。私が会社側だったら、やっぱり受け入れがたいかなとは思いました。

JEEDのHP

Q：お仕事内容は？

A： シフトの管理や請求業務のサポート、電話対応などをメインでしていました。なので、ずっとパソコンに向かっていました。

Q：利用した就労支援制度は？

A： 市の制度とJEEDという国の制度を併用していました。支給時間数は1日4時間までだったので、その4時間を1日のうちに割り振って、同じ事業所のヘルパーさんに入ってもらっていました。

♫ 一人暮らし ♫

JEEDについて調べていたときに、家賃補助の制度を見つけたんです。働いている障害の方が、通勤が困難という理由で引っ越した場合に補助が受けられる制度なんですが、就職後半年以内に申請しないと使えないんですね。本当はお金を貯めて、準備が整ってからと思っていたんですが、母にも相談して一人暮らしを決意しました。お仕事も始まったばかりで、すごく忙しくはあったんですが、一人暮らしが私の夢だったので楽しかったです。きついのも含めて、「これが自立か」って思いながら一人暮らしをスタートしました。

Q：一人暮らしを始めて良かったことは？

A： 母の手から離れたことです。一緒に住んでいた時には煩わしかった面が、一人になると「できない」「わからない」っていうことが結構あって、離れることで「母にもやっぱり助けられてたんだな」というのはすごく感じています。

Q：普段の生活で大切にしていることは？

A： 母は家事が完璧なので、私もできる限り、母に近づきたいと思っているんですが、私はペットボトルのキャップが開けられないぐらいの握力なので、お野菜を切るとか、料理は難しいんです。でも「お鍋を混ぜるのはできる」とか、自分で少しずつできることを見つけながら生活していくのも楽しいです。

Q：余暇は何をされているんですか？

A： 休みの日はなるべく友達と遊ぶようにしています。一人の時間もすごく好きなんですが、やっぱり人と会うのが好きなんです。ゲーム友達と遊んだり、あとお散歩も好きなので、友達と遊んで早めに切り上がったら一人で音楽を聴きながらお散歩していますす。1年に1回は音楽フェスにも参加します！いろんなアーティストを見れるのが楽しいです。

♫ 遠距離恋愛の今日この頃 ♫

今、韓国人の彼氏と遠距離恋愛をしてるんです。X（旧 Twitter）で知り合ったんですが、日本旅行がもともと好きで、「今度日本に行く時にちょっとご飯でも」という感じで一度会うことになって、そこから付き合い出しました。もう2年半になります。

普段は毎日、連絡を取っているんですが、2～3カ月に1度は会いに来てくれて、頑張ってもらってます。外出時の対応ももう慣れたもので、人がいたらよけてくれるとか、そういうのも自然にしてくれます。私も今年、初めて韓国に行きました。母も前々から韓国に行きたがっていたので、親孝行も兼ねて連れて行って、とても楽しく過ごすことができました。

Q：「恋愛に踏み出せない」という若者が多い中で、アドバイスはありますか？

A： 車椅子に関係なく、恋愛って出会いを探さないとないので、SNSも使って、友達でも恋人でも探した方がいいのかなと思います。私はSNSで知り合って、そこから仲良くなったら会うこともしてたんですね。「会うのが怖い」とかもあると思うんですけど、そういうことも学んでいかなきゃいけないと思うので。「人と会う」のは、障害者だから大切ということもあると思います。

♫ この先を見つめて ♫

就職後はフルタイムで仕事をしていたんですが、首や腰が痛くなり、シップだらけで会社に行く日が続きました。風邪で体調を崩して救急車で運ばれて入院したことも2回ほどあって、1年で退職したんです。当時は、学校や遊びなども、友達と同じ時間、同じ体力でできていると思っていたので、「フルタイムでも大丈夫だろう、気合いでなんとかなるだろう」と頑張っていたんですけど、日々疲れた状態が続いて、免疫が落ちていたんだなと感じています。

なので、体力的に自信がなくなったというのと、能力的にも「本当に覚えが悪いな」とか、「人との話し方がまだまだなってないな」とかは日々感じて出社していたので、仕事自体にも少し自信が持てないです。不安は残っていますが、今後は自分の体調に合った働き方ができればと思っています。

ただ、退職して時間ができた今、CIL（自立生活センター）の活動に参加して障害について話し合ったり、障害者の方が抱えている問題に取り組んだりと、自分の幅がすごく広がりました。それに、事務作業で1日パソコンに向かうより、人と会って話すほうが好きなことに気付けました。仕事を辞めたからこそ広がった幅があるというのは感じていますし、これからもCILの活動に参加しながら、自分のやりたいことを見つけられたらと思っています。

♫ 読者へのメッセージ

私は一人暮らしができたことをすごく誇りに感じていて、普通学校に通えたのも自慢ではあるんです。でもそれが実現できたのは、自分の実力じゃなくて、周りに助けてもらったからだと思っています。周りの助けで実現したことが、私の人生の半分以上を占めていると感じるので、たとえ本当にやりたいことが分からなくても、自分のやりたいことをどんどん周りに発信していくことが大事だと思っています。

ダミー FSC 13
※この製品は、FSC® 認証材、再生資源、およびその他の管理原材料から作られています。

高浜敏之代表より新年のご挨拶

株式会社土屋
代表取締役 高浜 敏之

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は格別のご支援・ご高配を賜り、心より御礼申し上げます。おかげさまで、株式会社土屋は本年、創立５年を迎えることができました。これもひとえに、日頃よりご信頼をお寄せくださるクライアントの皆さまのご愛顧の賜物と、深く感謝申し上げます。

当社は現在、全国47都道府県でサービス提供体制を整えておりますが、支援を必要としながら十分にサービスを受けられない方もまだ多くいらっしゃいます。私たちは、そうした方々の声に耳を傾け、誰もが安心して暮らせる社会の実現に向けて、これからも引き続き尽力してまいります。

そして創立５周年を節目として、本年は「サービスの質の向上」と「働く人のモチベーションの向上」を目指し、新たな取り組みを進めております。まず、人事評価制度を刷新し、従業員の努力や能力が正当に評価され、報酬にも反映される仕組みを整えました。また、現場で活躍する人材を称える社内イベントの導入も予定しており、これによってケアの質を評価する制度が構築されていくと考えています。教育システムもさらに洗練し、ケアの質を高める文化を育んでまいりますので、クライアントに皆さまには、これらを通じて、より良いサービスの提供に期待していただければ幸いです。

とはいえ、介護サービスの特性上、ケアの質はどうしても個人の資質に大きく左右されます。より良いサービスを提供するためには、資質や適性の高い人材に当社を選んでいただけるような仕組みづくりが重要だと考えています。そのため、マーケティングやブランディングと連動しながら、求職者からも信頼される組織づくりに努めてまいります。

また昨年は「CSR 統合報告書」を発刊しましたが、今年も引き続き、透明性の高い情報開示を通じてステークホルダーの皆さまとの信頼関係の構築により一層努めてまいります。同時にコンプライアンス体制を強化し、虐待・身体拘束・ハラスメントの防止など、安心して働ける環境、安心してサービスを受けられる環境の双方を整えてまいります。

本年も、皆さまの信頼にお応えできるよう、そして社会に必要とされる企業を目指してまいります。引き続き、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

■新事業所開設のお知らせ

ホームケア土屋

2025年11月1日 和歌山県南部（新宮市）に ホームケア土屋を開設！

ホームケア土屋では、“土屋だからこそ実現できること”に、チャレンジ精神を持って取り組んでいます。その一つが、山間部や離島など、交通の不便な地域への「僻地支援」です。こうしたエリアにも事業所を開設し、サービスを必要とする方々のニーズに応えていく方針です。同時に、現地で一人でも多くの方にアテンダントとして活躍していただけるよう取り組んでいきます。

コンプライアンス憲章を策定

コンプライアンス憲章は、土屋グループ全体で法令遵守の重要性を再確認し、その姿勢を明文化したものです。全職員にブックとして配布し、2025年4月～7月には本ブックを用いた全４回の社内勉強会を開催しました。今後も、法令遵守を基盤とした誠実な事業運営を通じて、信頼される組織づくりを目指します。

■委員会の紹介 土屋〈土屋の委員会〉

土屋では、委員会活動を通じて「働く人も、サービスを受ける人も安心できる環境づくり」を進めています。今回は、全13の委員会のうち６つをご紹介します。

○虐待防止・身体拘束適正化委員会

虐待や身体拘束の防止に取り組んでいます。万が一、虐待や身体拘束が疑われる事案が発生した場合には、速やかに状況を把握し、対応のモニタリングと必要なサポートを行います。また、「身体拘束等適正化のための指針」を掲げ、アテンダント一人ひとりが身体拘束の廃止と適正化を意識し、身体拘束に頼らない支援の実践に努めています。

○リスクマネジメント委員会

事故の未然防止と、クライアントおよびアテンダントの安全確保を目的に、ヒヤリハットの収集に取り組んでいます。前期は、事故・ヒヤリハット事案を合わせて 1,003 件収集しました。また、緊急時に迅速かつ適切な対応ができるよう、行動手順を分かりやすく示した「緊急時フローチャート」を各事業所で作成しています。

○医療隣接行為研究委員会

医療隣接行為（グレーゾーン行為）については、可能な限り実施を避け、やむを得ず実施する場合には、土屋の承認フロー（４つの要件）を満たすことを条件としています。当委員会では、医療隣接行為の実態を把握しつつ、より安全な実施を目指して審査会や勉強会を開催し、クライアントが一日でも長く在宅生活を送れるよう取り組んでいます。

○高齢者地域生活推進委員会

高齢者ができる限り在宅で生活を続けられるよう、在宅限界を迎えつつある方々に必要なサービスの考案・提供に取り組んでいます。また、定期的な勉強会や啓発イベントを通じて従業員の知識向上を図るとともに、認知症の方が社会の中で自分らしく暮らせるよう支援しています。

○知的障害者地域生活推進委員会

知的障害のある方が地域で安心して暮らせるよう、障害の程度やこだわり、環境、支援の状況、さらにはご家族やアテンダントの想いに至るまで丁寧に把握するよう努めています。また、外部講師による勉強会を開催し、対応方法や関わり方、注意点などについて学び、知識と技術の向上を図っています。

○医療的ケア児地域生活推進委員会

医療的ケア児のご家族は、お子さんが生まれてからずっと不安の中で日々を送っています。
情報共有の場も限られ、ご家族が 24 時間体制でケアにあたっているのが現状です。当委員会では、事例検討会の実施を通じて、医療的ケア児を一人でも多く支援できる体制づくりに取り組んでいます。

■委員会の紹介 全地連〈全国障害者地域生活支援事業者連絡会（全地連）の委員会〉

土屋がリーダーシップをとる全地連（重度訪問介護の提供事業者による任意団体・2025年７月発足）でも、さまざまな委員会活動が始まっています。
今回は、そのうちの３つをご紹介します。

○倫理向上委員会

業界のガイドライン（倫理綱領）を策定し、サービスに携わる人たちが守るべきルールを定め、共有していく方針です。

○サービス向上委員会

土屋のみならず、業界全体のサービスの質やモラルの向上に取り組んでいく方針です。

○政策提言委員会

業界白書の作成に向けたプロジェクトが始動しました。現在、サービスを受ける側・提供する側の双方にとっての課題（地域間格差、人手不足、事業者不足など）を調査・研究しています。今後は、その結果をもとに白書をまとめ、国への提言を通じて法改正などの実現を目指します。

クライアントのみなさまへ

広報土づくりへのご意見・ご感想はこちらまで
tcy_shachoshitsu@care-tsuchiya.com

当社介護サービスにおいて虐待や身体拘束が疑われる場合がありましたら、下記までご一報ください。
client@care-tsuchiya.com

発行元　株式会社土屋
岡山県井原市井原町 192 番地２
久安セントラルビル２階
優しさを誇らしさに 土屋

※この製品は、FSC® 認証材、再生資源、およびその他の管理原材料から作られています。